

浄土

monthly JODO

2020
April

4

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

この修復された須恵器を見つけたのは、今年の正月十二日の東京・代々木のけやき通り大江戸骨董市である。ラッパ状に広がった口縁部が継ぎ合わされ、半分近く欠けている。店主によれば発掘品で時代は平安末期、口縁部の欠けは破片の全部は見つからなかったからだろうとのこと。

胴の中ほどに直径十五ミリほどの穴があいている。

店主は穴に指を入れて、ここに棒を差し込んで柄杓として使っていたのだらうと言う。違いますよと言おうとしたが、これから値段の交渉もあるし、気持ちよく喋っている店主の機嫌をそこねてもまずいなど、黙って講釈を聞いた。ひとしきり話が終わったところで、いくらですと尋ねると三千円とのこと。高くはないと思ったが、正月だし講釈もたっぷり聞いてやったことだし、もう少し安くならないかと二千五百円でどうだ

らうと言うと店主は少し考えて、いいよ二千五百円だと渋い顔で応じてくれた。

須恵器を用途で分類すると、貯蔵用の甕、壺の類があり、あとは供膳用、祭祀用に分かれる。貯蔵用の甕は時代の変化をあまり受けることなく、普遍的な形で各時代を通して作られている。壺に関しては口頸部の変化に従って数種の器形に分けられる。口頸部が大きく外反する広口壺、口頸部が上方へ直立した形の直口壺、口頸部の短い短頸壺、反対に長い長頸壺など、たんに貯蔵用としてばかりでなく、液体を注ぐ器や祭器と考えられるものもある。

さて、この胴体部分の穴である。こういった胴部に穴をもつ須恵器を隠(はそう)という。古墳時代後期、おもに酒を注ぐ容器として作られた須恵器で、この穴に竹管を差し込みそこから酒を注ぐ。骨董屋の親父さんが言う柄杓として使用していたとする説は初めて聞いた。しかし考えてみると、当時のことを見た人間はもういないのだから、その柄杓説を間違いだと言言する自信は私にはない。

欠落がなければそれ相応の値がつくのだろうが、そのおかげで私は買うことができた。このシルエットは負け惜しみでもなんでもなく、なかなか緊張感があつて好ましい。実の落ちた樫の枯れ枝などを投げ入れて飾っておくのも一興である。

高さ110mm。口径110mm、胴部径最大80mm。口縁部の肌には、凸帯と沈線帯が数条。硬く焼きしまっており口辺を爪で弾くと金属的な音をする。底は丸く、手のひらにすっぽりおさまる。口縁部の緊張感と、胴部の穏やかな曲線の対比が不思議な味わいをももたしている。



浄土

2020/4月号 目次

往生抄	戸松啓真	2
法然上人と親鸞聖人③④	林田康順	8
連載 微風吹動	石田一裕	14
連載 江戸の川を歩く③⑥	森 清鑑	18
連載小説 渡辺海旭⑩⑪	前田和男	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

往生抄

浄土アーカイブ 本誌昭和43年1月号より

一九六―二〇〇〇
大正大学名誉教授
大本山光明寺百十一世法主

戸松啓真

人は信仰がなくても生きることではできる。また死ぬこともできる。しかし時には、人は信ずることによって生きる上に或る不思議な力や、信念をあたえられる。またそれは何びともさけることのできない死滅の恐怖を和らげることがある。往生という語は、古くは中国において梵語經典から漢訳された無量寿經や阿弥陀經に見ることができる。それによると極樂淨土へ「往きて生れる」ことである。それはこの世の穢土を去って、あの世の淨土に生れることである。従つて必ず死を媒介とする。それゆえ後に、日本の通俗語では死と同じ意味につかわれた。その人の往生は立派であつたというがごときである。このように往生という語は、一般にはたいした矛盾もなく生と死との相反する二つの意味をもつ言葉として用いられてきた。

仏教ではこの世で人間が迷ひ苦しむのは、人間に煩惱があるからとする。そしてその煩惱は、人間の生死そのものから起りきたるものとみる。むさぼり（貪）といかり（瞋）とおろかさ（痴）は、いろいろな煩惱の根本となるものである。釈尊はそれゆえ、生と死を四苦の中に入れて老病と共に、いかにしてその苦から脱すべきかを求道の出発点とされたのである。このように煩惱は、人間の生死そのものに深く潜在しているものであるが、多くの人はそれを自覚しない。ちょうど本当のことは何も知らないのに、知っていると思つてゐる人が多いように。そして煩惱は時には人間を破滅におとし入れる。そればかりでなく、ひとりの人間の煩惱は多くの人を集団を国家を破滅にいたらしめることさえある。しかしながら仏教は人間の本質を、このような灰色の面だけとみるのであろうかというところではない。一方では煩惱をみとめながら、他方では「一切衆生悉有仏性」というように、どんな人間でもみな仏となるべき本性があるとみるのである。そこに明るさがある。正し

い仏法によるならば、悪人も仏になれるのである。人間が仏法を見捨てても、仏法は人間を見捨てることはないのである。

大乘の仏教では、人間の生死そのものに根ざす煩惱を消滅させるのに二つの法があるとする。一つはこの世において自分の力で煩惱を消滅させて、四乗の果を得ようとする「聖道門」である。いわばこの世で悟って仏になることである。これは非常に困難な道で、すでに大乘月蔵經というお経に、これまで一人も成就した者がいないとのべている程である。聖道門とは日本の宗でいえば、真言、天台、禪などである。さてもう一つは「浄土門」である。これは浄土に往生して、煩惱を滅して仏になる道である。浄土に往生するということは、この世の生の彼方に死して生れることである。そのためにわれわれは生きている限り念仏を申すのである。なぜならばわれわれの申す念仏とは、往生のために仏と釈尊がえらばれて付与されたものであるからである。それが他力の念仏である。念仏はどこまでも、われわれがとる念仏であるが、一声一声の念仏で往生がきまるのは、仏がおきめになったものだからである。「阿弥陀仏は一念に一度の往生をあておき給える願なれば、念ごとに往生の業となるなり」とは法然上人のお言葉である。

そして法然上人が念仏は一念でも多念でも同じく往生するといわれたが、しかも生きていく限り相続せよというのは、いかなる意味であろうか。一念で往生できるなら、多念相続の必要はないのではないかという思いがする。ここで法然上人が『十二箇条問答』で述べられた次のお言葉を思いおこすのである。即ち「つねに臨終の思いをなしてとなうべし」と。そして平生の念仏と臨終の念仏とは何の変わりもないのであり、「平生の念仏も死ぬれば臨終の念仏となり、臨終の念仏ものぶれば平生の念仏となるなり」（『念仏往生要義抄』）

といわれている。このことは平生の念仏というけれども、よくよく考えをいたせば、臨終の念仏と何ら変りはないのではないだろうか。今日一日生きたということは、今日一日死んだことである。五十年をよくも生きてきたということとは、実は五十年死んだことである。あと二十年の生しか残されていないということであろう。そのことは、生と死していることは死でもある。即ち生の中に死が入りこんでいることである。念々生死である。念々生死であるから、往生のためには念々相續が大事でなければならぬ。法然上人が一遍の念仏であとはいらぬというような一念往生義でもなく、信の一念以後の平生の念仏は報恩の念仏であるというようなものでもなく、死ぬまで念仏を申せと説かれたことは、煩惱具足のわれわれに深い意味があるのではないかと思う。それを自力的などというのはあたらないのである。

過日、ある真宗寺院の仏教文化講座で「法然上人の念仏」という話をした時、一つの質問を受けた。その聴衆はあらかじめ聞くところによると、五十人位が常連で真宗の教えには相当知識のある者、あとの五十人位はその都度の聴衆とのことであつた。質問というのは、親鸞聖人が宝治二年（一二四八）に書かれた『高僧和讃』によると、法然上人がなくなつた時に奇瑞があつたというが、それは本当であるかというのである。それに対して、私は次のように答えた。法然上人の伝記によると、臨終の幾日か前にお弟子が病床の枕元の弥陀像の御手から、臨終の行儀に従つて五色の糸をおとりになるようすすめられた時、上人はそのようなことは必要ないとこれをしりぞけられたのである。また法然上人と同時代の天台の慈円僧正の『愚管抄』という歴史書には、法然上人の御往生であるから何か特別なことがあるかも知れぬと人々が集つたが、さしたることもなかつたと記している

と答えた。すると再び質問者は立った。そして親鸞聖人がそのように書いたのであるから、それは事実ではないかと繰返した。私もまた同じ答えを繰返した。ただこのように言葉を加えた。即ち宗教的眞実というものは、或る者には事実であるが、他の者にはそれが事実でないということもある。親鸞聖人はそのような師の奇瑞をかく信じていたのであると。こんどは質問者は、笑いながら引き下ってくれた。あとで控室で係の方から、あの質問者はなかなか執拗で、一回や二回では引き下らないのに、今日は珍しく笑顔をみせたということを聞いた。私はその質問者がどうしてあのような質問をしたのかはかりかねたが、恐らく私のお話した「法然上人の念仏」の一部に、上人の念仏は平生即臨終の念仏であつて煩惱具足の人間なるが故に平生の相続を重んじるのであるということ聞かれて、法然上人の臨終の奇瑞を認めさせることによって、親鸞聖人の現世主義的な念仏に対して、法然上人の念仏は来世主義的ではなからうかという公式論を引き出させるためではないかと思つたのである。

後日、法然上人の最期の場面をしらべてみるため七つの伝記をみた。そのうちの一、二のものには、臨終にあつて弥陀三尊の来現を見たという弟子についてのべられているが、多少の潤色はあつても、特に奇瑞を強調しているものはないのである。このことと臨終の行儀をしりぞけられたということから、私は法然上人の念仏が臨終よりも平生に重きをおかれたものと思うのである。（ただどの伝記も御臨終の幾日か前に紫雲がたなびいたということは共通して記していることである。が紫雲については別の機会にゆずる）

さらに法然上人の弟子であつた親鸞聖人も、平素の言葉として「某閉眼せば、加茂川にいでて魚にあたうべし」とのべられたというが、その最後は『伝絵』によると、口に世事

をまじえず、ただ仏恩の深きことをのべ、声に余言をあらわさず、専ら称名たえることがなかったのである。また同じく法然上人の念仏の流れをくむ法孫一遍上人も、かねてお弟子が上人の臨終についてたずねられた時、よき武士と道者は、死することをあたりに知らせぬことぞといわれた。そして自分が死んだ後には「野に捨て獸にほどこすべし」といわれている。また往生の前に、弟子が紫雲のたなびいたことを申し上げると「さては今明は臨終の期にあらざるべし。終焉の時はかような事はいささかもあるまじき事なり」とのべられた。正応二年（一二八九）八月二十三日の朝早く阿弥陀經の読誦の終るとともに息たえられたが、諸人さらにこれを知らずという。それが一遍上人の最期であった。

三人のよき念仏者は、ひたすら往生のために念仏を申された。念仏のたえた時がいのかのたえた時であった。そしてその念仏は、現世においては自らの生の支えとなつて、たくましい生命力を発揮された。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180-245231

法然上人 と 親鸞聖人

【連載三十】——おわりに②・法然上人の世界観——

法然上人の一代仏教観——偏依善導一師の意義——

前回は、親鸞聖人の世界観について、特に一代仏教観と俱会一処への視座を取り上げて、その特徴を整理図示しました。今回は、これまで述べてきた法然上人の世界観について整理図示していきたいと思います。

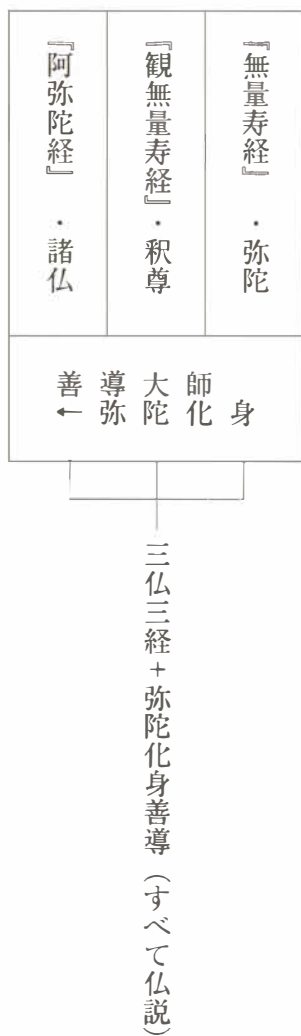
法然上人の一代仏教観は「帰納的」と表現できます。まず法然上人は、八万四千とも称される無数の一代仏教の經典から「浄土三部經」のみを正依の經典として選び取られます。そして、その「浄土三部經」を理解するにあたり、慧遠・吉藏・智顗・基・良源・源信・永観・覚鑊等といった名だたる高僧はもとより、曇鸞・道綽・迦才・懷感等といった多くの浄土教者をも退けて、ただ善導一師に偏依するという立場を提唱されました。なぜなら善導大師は、阿弥陀仏の化身として広く崇められ、法然上人も二祖対面という宗教体験を

林田 康順

（大正大学教授）

通じて善導大師が阿弥陀仏の化身であることを確信されたからです。つまり浄土示では、阿弥陀仏ご自身が、善導大師の著作を通じて「浄土三部経」を解釈されたという立場を採るのです。そして、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』において、それぞれ阿弥陀仏の本願・釈尊の本懐・諸仏の証誠が中心に説かれ、その総意として弥陀・釈迦・諸仏という三仏の選択に基づく念仏一行の教えが開示されると受けとめるのです。次の【図】に示すように法然上人は、「三仏三経」と「弥陀化身善導」という「仏説」のみによつて浄土宗の教えの骨格を形作り、いかなる者にも付け入る隙を与えない、鉄壁な教義の体系を構築することに成功されたのです。

【図】法然上人の一代仏教観―仏説による教義の構築―



法然上人による阿弥陀仏・極楽浄土の理解―法身の生け捕り―

こうした一代仏教観に立たれた法然上人は、阿弥陀仏と極楽浄土について、次の【図】のように理解されました。

【図】法然上人による阿弥陀仏・極楽浄土理解の一断面―法身の生け捕り―

阿弥陀仏
 (報身・真身)
 内証―四智・三身(У法身)・十力・四無畏
 外用―相好・光明・説法・利生

化身・化仏(円光・摂取不捨・来迎引接)

極楽浄土(報土・真土)↑指方立相(無分別後得智・出出世間智)

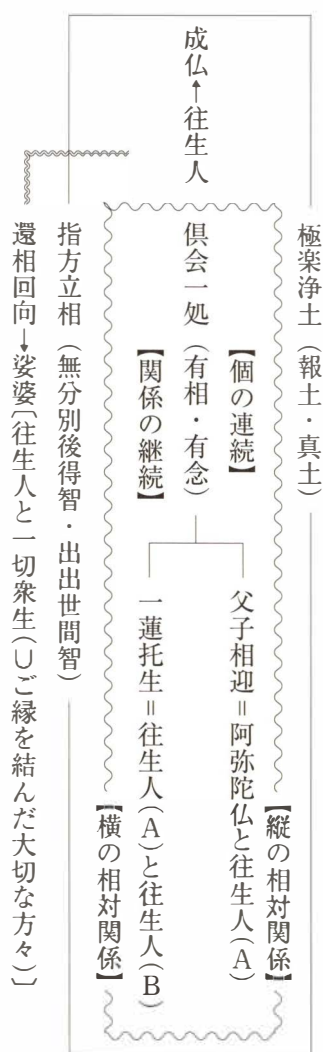
すなわち、『無量寿経』に説かれるように阿弥陀仏は、五劫思惟されて四十八願を建立され、兆載永劫の修行を経て十劫前に正覚を開かれた「報身・真身」であり、『選択集』に説示されるように「四智・三身・十力・四無畏」という悟りの内容(内証)を体得されています。ここで法然上人は、法身を含む三身を内証の功德に取り込むことによって「法身の生け捕り」に成功されます。これまで、こうした限定を設ける祖師がいなかったため、阿弥陀仏の捉え方は千変万化していましたが、法然上人はこれに終止符を打つことを目指し、「浄土三部経」に説示される仏身こそ阿弥陀仏に他ならないことを明らかにされたのです。そして、『観無量寿経』『阿弥陀経』等に説かれているように、大慈悲という意業を仏心とする阿弥陀仏は、身業の源となる妙なる「相好」を具え、その相好から限らない「光明」を放ち、口業等を通じて今現に「説法」し、救いの働きである「利生」を施されている(外用)と捉えられました。さらに『逆修説法』において法然上人は、真身の阿弥陀仏が、さまざまな働きをする化身・化仏(円光・摂取不捨・来迎引接)を現出されると指摘されました。こうした身口意三業を具えた阿弥陀仏だからこそ、私達がお花やお灯明・お線香をお仏壇やお墓に供えて台掌・礼拝する姿をご覧下さり、私達が「南無阿弥陀仏」とお念仏を称え、經典や詠歌・

和讃を唱える声をお聞き下さり、私達が苦しいこと・悲しいこと、あるいは、楽しいこと・嬉しいことを報告すれば、その思いをしつかりと受けとめて私達に心を寄せて下さるのです。さらに阿弥陀仏は、西方という方角を指し示し、妙なる莊嚴を具えた極樂浄土を建立されました（指方立相）。その極樂浄土は、私達凡夫の煩惱まみれの知恵（分別智・世間智）を断じて、悟りの智慧（無分別智・出世間智）を体得された阿弥陀仏が、大切な方を愛おしみ、浄土での再会（俱会一処）を希求する私達凡夫の姿をお察しになり、真理の境界（涅槃界）でありつつも、あえて有相・有念の相対的・二元論の場（無分別後得智・出世间智）を現出して建立された世界（報土・真土）なのです。

法然上人における「俱会一処」への視座

そして、こうしたお浄土であるからこそ、次の【図】のように『阿弥陀經』に説示される「俱会一処」が叶えられるのです。

【図】法然上人における「俱会一処」への視座



すなわち阿弥陀仏は、お念仏の声に応じて私達の臨終の場に来迎し、速やかにお浄土に引接して、その過程で親しく私達に声を掛けて下さいます。阿弥陀仏は、すべての往生人とこうした相対的な関係を結ばれます。ここに阿弥陀仏とAさん、阿弥陀仏とBさんという関係が成立します。これを「父子相迎」といい、阿弥陀仏と往生人の縦の相対関係と呼べるものです。また、浄土往生を遂げた往生人は、先立たれた方や後からやって来る方のお浄土での再会が叶います。そこでは、前世でのさまざまな因縁について語り合い、あらためて心と心のふれあいを深め、たくさんの思い出話に花を咲かせることができるのです。ここにAさんとBさん、AさんとCさんという相対的な関係が成立します。これを「一蓮托生」といい、往生人と往生人の横の相対関係と呼べるものです。こうした一蓮托生は、AさんやBさんが、それぞれの個別の心（心意）を失うことなく浄土往生を遂げ（個の連続）、お互いの心と心のふれあいという関係が維持される（関係の継続）からこそ実現するものです。「俱会一处」とは、こうした父子相迎と一蓮托生が共に叶えられる姿なのです。

さらに私達は、極楽浄土に往生した後、阿弥陀仏の宮仕えとして娑婆世界に生きる一切衆生をお浄土に導く還相回向を勤めることとなります。この還相回向の理解をめぐって法然上人は、私達凡夫のありのままの思いと阿弥陀仏の大きな慈悲の御心との両者を汲み取り、さまざまな法語を通じて「ご縁を結んだ大切な方々のもとへ還相回向しても構わないよ」と優しく語り掛けて下さいました。こうした俱会一处や還相回向が叶うお浄土だからこそ、私達は大切な方々と共に阿弥陀仏の御前で尊い教えを拝聴して、心おきなく修行に励み、速やかに悟りを開くことができるのです。

たった一つの命を与えられた私達は、一度きりの生涯を送る中で、かけがえのない大切な方々と尊いご縁を結んでいく一方、自身の死や大切な方々との死別も約束されているお

互いです。そんな私達にとって、阿弥陀仏が俱会一処や還相回向が叶うお浄土を建立して下さったことは、この上ない喜びです。だからこそ私達は、日々お念仏を相続して、命ある時は、阿弥陀仏の光明に照らされ、お浄土に先立たれた方々からのお守りをいただいて心安らかな幸せな日々を送り、命尽きた時には、阿弥陀仏の来迎をおおぎ、大切な方々の待つお浄土へ共に往生させていただきましよう。

御礼

足掛け五年、全三十回にわたり、伝統ある『浄土』の誌面を与えて下さった編集部の皆様にあつく御礼申し上げますと共に、本連載をご覧いただいた多くの皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。合掌

【参考拙稿】

- ①「法然上人における俱会一処への視座―親鸞聖人との対比を通じて―」
（『石上善應教授古稀記念論文集・仏教文化の基調と展開』二、平成一三年五月）
- ②「講義録・現代人における法然上人の受けとめ方―俱会一処・法然上人のものさし―」
（浄土宗大阪教区布教師会・平成一五年三月）
- ③「新しい親鸞聖人研究に向けた一提言」（『真宗研究会紀要』三六、平成一六年三月）
- ④「講義録・法然上人のみ教え―法然上人と親鸞聖人―」
（浄土宗兵庫教区布教師会、平成一九年二月）
- ⑤「法然上人八〇〇年大遠忌記念 いざといつときのための布教Q&A 林田康順先生講演録」
（浄土宗千葉教区・浄土宗千葉教区布教師会、平成二三年三月）
- ⑥「『高等学校公民科「倫理」教科書における仏教教団祖師の取り扱いをめぐる一考察―法然上人と親鸞聖人を中心に―」
（『福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集』二一、平成二五年二月）



微

風

吹

動

目に見えぬもの

ほんとのほんとうっていうのは、子どもにも大人にも、
だれの目にも見えないものなんだよ。

フランス・ファースラス・チャーチ著、

大久保ゆう訳 「サンタクローヌはいるんだ」

(ニューヨーク・サン紙社説)

石田一裕

一月とは思えぬ暖かな陽光が、紅梅をキラキラと輝かせていた。日当たりの良い南側の庭では、梅の花が開いていたのだ。随分と早いものだと思いつながら、鼻腔には梅の香が確かに届いてくる。報道を通じて、今年は暖冬で降雪量が少ないなどとは聞き及んでいたが、目に飛び込む一輪の花と甘いその香りは、季節の移り変わりを実感させるものであった。

春は命の力強さを見てとることのできる季節である。冬の空気が緩むと、固まっていた命が動き出し、庭の彩が増していく。肌を刺す冷気は、穏やかに包み込む空気へと変化し、その空気には命を躍動させる力がある。

春が訪れて躍動したのは、動物や植物だけではなく。ウイルスである。中国武漢で大流行し、人に感染すると肺炎を引き起こす新型コロナウイルスが、瞬く間に世界中に広がった。肉眼では目にするこのできない極めて微小な存在が、世界中の人間を慌てふためかせている。

当初は、多くの人にとっては対岸の火事であった。しかし、たくさんの人や物が国境を越えて移動するグローバル社会は、人に依存するウイルスにとって、活動範囲を広げるための条件が整っていた。それゆえ瞬く間に、世界中に拡散した。日本にもである。

国内では北海道から沖縄まで感染者が確認され、広がりを見て取ることができる。ウイルスは単独で増殖することができず、他の生き物に寄生することでその数を増やしていく。人の動きに乗じて活動の範囲を広げることで、ウイルスなりに生きていく術を実践しているのであろう。しかし、人間にとっては迷惑な話である。

それにしても、目に見えないものというのは厄介なものだ。もしウイルスが目に見えたら、触れないように注意したり、避けながら歩くこともできる。もしかしたら、あまりのウイルスの多さに途方にくれることになるかもしれないが。

何れにしても目にすることができないから、必要以上の恐れを抱いてしまう。見ることはそのものを理解することで、理解できないことは不安を生み出す。だから見えないもの見えるようにと努力し、技術を発展させ、ついには肉眼で捉えることのできないウイルスを見るための電子顕微鏡を人は作り出したのである。

宗教もまた見えないものを見るようにしようと努力を重ねてきた。巨大な建築物、壮麗な空間、厳肅な儀式、このようなものは宗教につきものだ。それらは神や仏の恩寵、慈悲、光明といった見えない働きを具現化し、それを通じて人間は超越的なものを把握してきたのである。

信は莊嚴より発す。

小僧の時分に、師僧よりよく言われた言葉だ。お寺は常に清潔で、ロウソクや線香はまっすぐと立てられ、僧侶はおもむろに儀礼を行う。それらを通じて、見る人は仏への信心を発することができる。

そのような莊嚴が成就した世界が極楽浄土である。様々な宝玉が大地を、木々を、樓閣を彩っている。その世界は仏道を修めるに最適な環境となっているのだ。寺院、そして本堂は、文字の上でしか知ることのできない、西方十万億土の彼方にある世界を、この世に再現した空間、仏を最も間近に感じられる場所である。

それは模造であるに違いはないが、見えないものを見ようとして、想像力を働かせ、この世で目に見える浄土を表現しようとした努力の結晶でもあろう。そのような光景を通じて、私たちは目に見えない仏の働きをしっかりと信じていくことができる。

一輪の梅をみて、移りゆく季節を掴み取るよう、本堂に佇む本尊に目を向けることで、極楽浄土が身近なものとなる。桜吹雪に無常を見てとる春の日に、無量の命を有する仏と向き会ってみよう。目に見えない本当を感じるために。

江戸の川
を歩く

第三十六回

江戸ウォーカ―

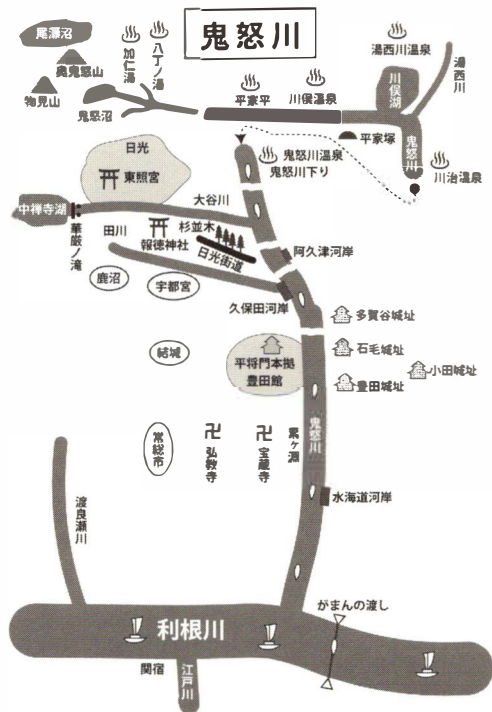
森清鑑

鬼怒川

北から流れてくる渡良瀬川を加え、利根川は銚子に向かつて東進する。右を見ると江戸川が江戸湾へ向かっている（関宿）。そして今度は北から大きな流れが再び流入。これが鬼怒川である。

鬼怒川の源流

源流は、鬼怒沼から発進する。その位置は、尾瀬沼と日光の中間。鬼怒沼の背後に、奥鬼怒山と物見山。沼の前に、山麓が広がり、幾筋もの流れが山麓を縫い、やがて一本化する。源流は、日光沢温泉、加仁湯、八丁ノ湯を繋げる。いずれも天然の岩肌を利用した、露天温泉。眼下には、溪谷を縫って走る鬼怒川が見える。やがてやや平坦な地形になると、平家平温泉。そして川俣温泉。右側に鬼怒川が流れ、時折、間欠泉が吹き出す。平家塚(墓)。そして川俣湖。源流からこの辺りまで、



平家部落。平家の落人が最後に辿り着いた処である。川俣湖の北に、湯西川温泉があるが、ここは特に平家末裔の文化を色濃く残している。この温泉を流れる川が湯西川で、川俣湖から出た鬼怒川に合流する。この辺りから鬼怒川は南に方向を転じる。すなわち江戸に向かう。そこに川治温泉がある。

鬼怒川温泉、 鬼怒川下り

鬼怒川の溪谷美は、随一である。鬼怒川温泉。鬼怒川下りを楽しむ。しばらく行くと、右から大谷川^{おおや}が入り込んでくる。美しい河川敷を持ち、清冽な流れ。それもそのはず、中禅寺湖（華厳の滝）から発する。東照宮の前を通り、ここで鬼怒川に合流する。大谷川、鬼怒川ラインは、江戸期、美しい景色を提供するとともに、重要な物資運搬路であった。

二宮尊徳終焉の地

大谷川の東照宮寄り、南に平行して日光街道杉並木。今市。報徳二宮神社がある（下今市駅）。二宮尊徳は此処で亡くなった。墓所もある。各地で農政復興を成し遂げた偉大な人物。日光神領の荒地復興を依頼される。これが最後の仕事となった。

阿久津河岸

鬼怒川は、大谷川を加えて、南下。氏家大橋を通り、左手に勝山城址を見て、さらに下ると、前方に阿久津大橋が見えてくる。その左に、江戸期、阿久津河岸があった。ここは、奥州南部で採れた米を江戸に送る舟運の中継地であった。例えば、会津からの廻米は、会津街道を、福島藩は奥州街道を使い、阿久津河岸まで陸路運送される。ここで舟に積み込み、下流の久保田河岸経由で、江戸川を使って江戸に運ばれたのである。

宇都宮

鬼怒川は、さらに南に下って、宇都宮の東縁を流れる。宇都宮というところは、広い沖積平野で鬼怒川の他に田川、釜川、新川、姿川が流れている。このような環境であるから、古代から人々の暮らしがあった。多数の縄文遺跡、紀元四〇七世紀頃の古墳がそれを物語る。市の中央に宇都宮二荒山神社がある。なんと西暦三五三年創祀と云われる。後に藤原家の血筋を持つ宇都宮氏が神官として就任し、その門前町を發展させ、勢力を築いた。宇都宮という名は、二荒山神社の別号、「宇津宮大明神」から来ている。大変格式の高い神社で、源氏の八幡太郎義家、頼朝など皆戦勝祈願している。家康も戦勝祈願。征夷大將軍の報告も行い、この神社に様々な形で寄進、援護している。

江戸になると、家康は、重臣、本多正純を任命する。本多は、宇都宮城と城下町を格段に整備。宇都宮城を天下の名城とした。

江戸期、宇都宮が發展した、もうひとつの理由は、日光街道、奥州街道の分岐点としたことである。つまり追分。日光に行く人と、奥州に行く人がここで分かれる。日光幕参の將軍、大名を始め、大勢の人々が集散。それに伴い物資の流通も拡大。かくて追分付近に宿が集中し、宇都宮宿は、最も大きな宿場に發展した。結果、関東の中心都市の格付けとなり、文字通り、「小江戸」と呼ばれる様になる。

また宇都宮市北西部で採れる、大谷石は、古くから露天掘りで採掘されており（宇都宮市北西部大谷町）、宇都宮城の建設にも使われている。江戸期、大谷石は相当広域に広まっていたのではないかと思われる。大谷石は、明治になって帝国ホテルを建設する際にライトがふんだんに使用したことで知られる。彼は、大谷石の加工しやすい利点を目を付けたのである。

久保田河岸

鬼怒川に戻る。舟をしばらく進めると、右側から美しい河川敷を有した田川が入ってくる（下野市）。ここに久保田河岸があった。田川は、宇都宮を走っているの、鬼怒川物量運搬に重要な河川であった。久保田河岸には八軒の河岸問屋があった。特に会津藩は、ここに大きな回米問屋を置き、取引をしていた。大体、鬼怒川の舟運を最大活用したのは、会津初代藩主、保科正之といわれる。彼は、秀忠の子で、家光の異母弟である。家光を徹底的に補佐し、家光も信頼。終生、この関係は変わらなかった。

結城

鬼怒川をさらに南下する。すると右側、結城市に入る（左は築西）。結城は奈良時代から結城紬の特産地として発展。鎌倉時代、隣的小山氏から

分かれた結城朝光が館を構え、以来、結城氏の城下町として発展してきた。従って小山との結びつきは大きく、相互物流は盛んであった。元禄十三年からは、結城藩水野氏が代々城主を勤めている。

平将門 豊田館

船を進めよう。常総（水海道^{みづかいどう}）に入る。左右に城跡がある。戦国時代の名残である。そこで右手を見ると平将門公本拠「豊田館」跡がある。ここが平将門の本拠地であった。将門は京都に出仕すること十四年。戻って来ると身内の勢力争いが勃発していた。彼は全てを平定し、関八州を治めることになる。その後の将門の運命を見ると、此の地が、いかに朝廷にコントロールされていたかが分かる。将門は鬼怒川を壕として使い、堅固な城郭を築いた。ここを拠点に江戸まで勢力を伸ばしたのである。

浄土宗 弘経寺 祐天上人 千姫の墓

舟をさらに南に進める。右手を見ると累ヶ淵。怪談「累ヶ淵」の舞台である。女性怨霊の話。累（るい、かさね）の物語は、元禄三年出版の仮名手本「死霊解脱物語聞書」で広まった。幕末、三遊亭円朝は、「真景累ヶ淵」を発表。大当たりとなった。しかし、これは実話である。この地に滞在した祐天上人がこの話を聞き、累と助の怨霊を解脱させたのである。祐天上人後に増上寺三十六世法主にして祐天寺の開祖。川沿いの現場近くに法蔵寺がある。累の菩提寺である。その法蔵寺の近くに浄土宗弘経寺がある。祐天上人はこの弘経寺でお勤めしていた。累の怨霊解脱の施しは、その時の話しである。弘経寺の山門を潜って、参道に行く。広い境内である。正面に本堂があり、その右手に「杉の巨木」が立っている。本堂の左手に千姫の墓がある。あの豊臣秀頼

の妻だった千姫。千姫の墓は伝通院奥にある巨石塔の墓だけだと思っていたが、弘経寺にも分骨されているのである。弘経寺の了学上人（後に増上寺法主）に深く帰依していた千姫は弘経寺を菩提寺と決めていた。立派な石柵と門。中央に石塔が建つ。弘経寺は徳川家から莫大な寄進を受けることになる。そして祐天上人は、この弘経寺と伝通院、双方にお勤めをしていたのである。

鬼怒川を下る。左手に水海道河岸跡が見える。舟運で栄えた大きな河岸である。まもなく眼前に茫洋と流れる大河、利根川が姿を現す。そこに鬼怒川は合流していく。その左に利根川の「渡し場」があった。通称「がまんの渡し」という。家康がこの辺りで鷹狩りをやった時のこと。利根川が増水して、容易に渡れない。その時、家康は舟夫に「無理をせず我慢して渡してくれ」と言ったという。今や、看板が立っているだけだが、このエピソードは家康が江戸造り構想に鬼怒川一帯、日光まで頭に入っていたことを示唆している証拠ではないかと思われる。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

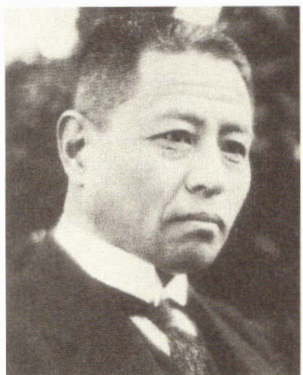
前田和男

第一〇五回

第三部

充実と稔りの白秋へ

澁沢栄一との謎にみちた親交 その四



渋沢との関係を「敵対」から「友好」へ変えた「国際情勢」の激変

当初は「敵対的」ですらあった渡辺海旭と渋沢栄一の関係が、一転して真逆の「友好的」となる契機は、仏教界をふくむ宗教界がとにかくに直面した「国際情勢」の激変にあった。一つは世界中を戦火に巻き込むことになる第一次世界大戦の勃発、もう一つはドイツのヴェルヘルム二世による黄禍論に端を発しアメリカで猖獗をきわめる排日運動である。

まずは第一次世界大戦によって引かれた資金だが、淵源はそれを遡ること十余年前、中国は廈門で浄土真宗大谷派布教所が放火された「事件」にある。当地に駐留する日本軍がそれを軍事介入の口実にしようとしたのではないかとの疑念を呼び、以来、これに反発した中国政府から日本の仏教諸派の布教権が認められない状況がつづいていた。そこへ世界大戦が勃発、日本は日英同盟を理由に参戦、

ドイツが権益をもつ山東半島を占領、その権益の継承にくわえ、当地の鉄道の租借権の十九年の延長など二十一か条におよぶ苛烈な要求を中国側につきつけ、軍勢力を背景に、それを認めさせた。その中には中国における日本仏教の布教権もふくまれていた。

これを尻押しすべく、日比谷公園で「仏教徒有志大会」が開催されたが、なんとその主催者は海旭ら若手改革派の「仏教徒談話会」であった。そして大会後の懇親会には、玄洋社の頭山満や黒龍会の国會議員など大アジア主義者も参加。その一か月後、「仏教徒談話会」の中心メンバーは、時の首相の大隈重信を訪問、「中国での布教権」を強く求めている。

さらに注目すべきは、海旭の古巣で帰国後は距離をおいていた「新仏教徒同志会」の有力メンバーの高島米峰がこの動きに加わったことである。米峰が編集長をつとめる「新仏教徒同志会」の機関紙『新仏教』は「布教権問題」を特集して廃刊。これをもって、「す

べての政治上の保護干渉を斥く」として時の権力と各派宗門中枢に対して一線を画してきた仏教革新派の運動の灯は消え、海旭らの新興改革派グループが仏教界をめぐる激動の帰趨の鍵を握ることになる。

もう一つ海旭と洪沢を近づける引金となったのは、アメリカはカリフォルニアから起きた排日運動である。これをうけて、同じく大正四年、サンフランシスコで日本の仏教徒を中心に「世界仏教徒大会」が開催され、「日系移民と日本仏教の布教の保護」を決議、東海岸のワシントンにウイルソン大統領をたずねて申し入れを行なった。この運動の主導者たちも、海旭ら若手改革派の「仏教徒談話会」と底流でつながっていた。

太平洋を隔てた日米いずれの動きも、外形的には「日本仏教界をあげてのナショナルイズム回帰」であり、五年前の「三教会同」以降、宿老たちの「偏狭なる国家主義への迎合」を一貫して危惧を表明してきた海旭の姿勢とは矛盾

するが、これをどう解釈すべきかは後述する。

一転、仏教護国団の旗振り役に

いっぽうで、海旭ら若手改革派が批判の矛先を向ける宿老守旧派——「三教会同」が機縁となつて結成され、メンバーに各宗派の要職者と洪沢栄一ら政財界の大立者を加えた「仏教各宗派懇話会」の動きもあわせて確認しておこう。

洪沢らの「仏教各宗派懇話会」は、同じく大正四年に、「仏教各宗派は和協提携し宗綱の刷新拡張を計り益々教化の本分を尽し以て皇運を扶翼せん事を期す」として、同「懇話会」を「仏教連合会」に改組。さらに翌大正五年秋には「仏教護国団」の結成にふみきる。

同団は結成にあたって八条にわたる「目的」を掲げたが、そのうちの三条をみれば、その背後には、政権の「仏教活用による国民精神の発揚」の思惑が働いていたことは明らかである。

三条 仏教護国団は仏教の本旨に依り尊皇護国の目的を貫徹する為国民精神の振作統一を図り済世利民の事業を経営す。

前述したとおり、海旭は、五年前の「三教会同」に違和感を抱き、そこから生まれた洪沢ら要路による「仏教各宗派懇話会」に「単なる懇親会とすること」を約束させている。この経緯からすると、その発展形である「仏教護国団」にも異議を唱えてしかるべきである。ところが、海旭は「仏教護国団」へ参加・合流。それどころか、洪沢のあいさつではじまった「結成式」の掉尾^{とうび}で、宣言と綱領を朗読して「旗振り役」を果たしたのである。いったい、海旭になにがあったのか。

共存する「リアリスト」と「侠客坊主」の化学反応

洪沢側の資料と「仏教護国団」関連資料に

あたったかぎりでは、洪沢ならびに「仏教護国団」側が海旭らに迎合した気配はない。あきらかに海旭の側が主体的かつ積極的に近寄ったと思われる。

ということは、海旭と仲間の改革派は、宿老たちにとりこまれ、それまでの主張を枉^まげて「転向」したのか？

海旭の性格からしてそれはないだろう。ここからは、あくまでも筆者の妄想であることをお断りした上でいうと、海旭の中に共存する「リアリスト」と「侠客坊主」の化学反応から生まれたものではないか。

まずは海旭の中の「リアリスト」である。海旭は若手の改革派仲間を語らって五年にわたって、各派宗門の宿老と政府の要路に物申すことによって彼らにその存在感を存分に印象付けることができた。このまま主義主張を続けても意味がない。そろそろ「高値」で売りこむ潮目である。反対のための反対をするのではなく、相手の懐に飛び込んで、自らの

主張を実現し内側から改革をしよう。足かけ十一年の長い不在の間、日本の既成仏教界の宿老支配は変わっておらず、宗門中樞内部に入って改革しないと取り返しのつかないことになる。そう判断したのではないか。

そんな海旭の「作戦変更」の背景には、「社会に貢献してこそ宗教」であり、すなわち「活仏教を実践せよ」という考えがあった。それは、留学先のヨーロッパでキリスト教の救済活動を目の当たりにし、帰国するやそれを参考にして日本の困窮者を救うために「浄土宗労働共済会」を立ち上げてすでに実践していることでもあった。

もう一つ海旭に「作戦変更」をうながしたのは、海旭の中でしばしば鎌首をもたげる「理不尽なことは許せない」という「侠客坊主」である。日比谷公園で開催された「仏教徒有志大会」の懇親会で、海旭は玄洋社の頭山満をはじめとする大アジア主義者の主張に大いに啓発されたのではないか。すでに紹介した

ように、そもそもシベリア鉄道で帰国の途次、奉天で新仏教運動で知り合った満蒙の外交官・北条大洋と再会、大アジア主義に共鳴している下地もあった。欧米列強による苛斂誅求^{かれんちゆう}の植民地支配に苦しむアジアの民のために日本の仏教徒は精神的後楯になるべきだ、との「俠氣」が海旭の心中に呼び起されたとしても不思議ではなかった。

これも筆者の妄想だが、ひょっとしたら宿老たちの一部は、海旭の中に共存する「リアリスト」と「侠客坊主」の化学変化をあらかじめ察知していて、反宿老の急先鋒をあえて迎え入れたのではないか。だとしたら宿老たちの老獺ぶりたるや大したものだが、その中に洪沢栄一がいたかどうかは神のみぞ知る、である。

海旭の「天皇主義への右旋回」の真意は？

ただし、宿老たちが政府の意を汲んで結成した「仏教護国団」に積極的に参加・合流す

るといふ海旭の選択が「正解」だったか否かは、後の歴史を見れば歴然としている。

すなわち、「三教会同」から「仏教護国団」への流れは、海旭の死後の昭和八年の国際連盟脱退、翌九年の「満州国」樹立からついに英米と戦端を開き、二つの原爆投下で降伏するまでの「聖戦」遂行のために国民を精神的に動員する大きな役割を担うことになるからである。

しかし、それは「後知恵」であって、この時点での海旭の選択を全否定するのは酷だろう。筆を先走らせると、大正十四年六月には「世界宗教大会」開催にむけて、神道・仏教・キリスト教の有志により「日本宗教懇話会」が結成されるが、海旭は理事に就任、その趣旨を「天皇と国体の尊奉の念のもとに国民を大同団結させる」と述べている。これを「天皇主義への右旋回」と指弾するのはたやすいが、海旭自身はそれを「変節」とは思ってもいなかったのではないか。すなわち、海旭からす

ると、「三教会同」以降、一貫して危惧を表明してきた宿老たちの「国家主義」はいわば「日本及び日本人第一主義」の狭隘なものであり、自らが尊奉する「天皇と国体」はアジアの無辜の民を欧米列強の隷属から救済する「大乘的なもの」で、それとは似て非なる別物である、と。

先に述べたように、第一次世界大戦の山東出兵後に頭山満ら大アジア主義者をまきこんで「中国での布教権」を強く求めて以来、海旭の姿勢はその意味ではたしかに首尾一貫していた。

影の月下氷人はユダヤの大富豪と ノーベル文学賞の詩聖

なお、これは論争的な重大テーマであるので、これ以上検証を深めるのは別の機会に譲って、本稿のテーマである海旭と渋沢との歴史的出现いについて筆を戻す。

経緯はともあれ、かくして、当初は「敵対

的」ですらあった渡辺海旭と洪沢栄一の関係は、「仏教護国団」の結成をもって「友好的」に反転した。それは海旭からの積極的な歩み寄りによるものだったが、一方の洪沢にとつてはなんとも皮肉な展開で、狐につままれた気分ではなかったろうか。

というのも、世界の平和安寧と自由な事業活動のためには神仏基の宗教大同団結が必要だとの信念から「三教会同」に関わり、有力宗教関係者の相互理解と連携を深めるために私財をなげうって「帰一協会」を立ち上げたものの、海旭が旗を振る「仏教徒談話会」などからの反発もあつて頓挫。ところが、今度と同じ海旭が「仏教護国団」に加わることによつて、洪沢が「帰一協会」に託した夢が甦つたかに見えたからである。

しかし、洪沢と海旭をより緊密な仲にするためには、海旭の「仏教護国団」への合流・参加だけではまだ不十分であつた。しかるべき「月下氷人」が必要だった。

これまでそれは国士館大学設立をめぐつて両者をつないだとされる頭山満と目されてきたが、洪沢史料館でデジタル化された五十巻にも及ぶ膨大な資料からは、頭山とは別の歴史的大立物が一人ならず二人も浮かび上がってきた。その「影の月下氷人」とは、フランスのユダヤ系金融王、アルベール・カーンと、アジア初のノーベル文学賞受賞者でインドの詩聖、ラビンドラナート・タゴールである。

(つづく)

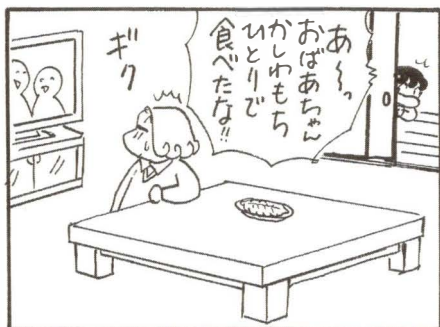
さっちゃんねネ

169

かい目

かまち♡よろう

かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『さっちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)



編集後記

雁の去りゆく後に春の風

岱潤

全く想像もしていなかった大変な状況になってしまいました。この本の発行時にはどのような状況になっているか不安です。新型コロナウイルス（COVID-19）の感染の収束を期待するばかりです。

先日仏教情報センター主催の講演会で、赤十字病院の鈴木直子さんに水難災害に備えるお話を伺いました。人が水にのまれたときどうすれば助かるかのお話のなかで、「ういてまで」のお話をしてくれました。人間はどんな人でも体の2%は浮く力を持っているのだそうです。口と鼻の部分は必ず水面上に出るのだそうです。

す。だから力を抜いて浮いて待てば助かる確率が確実に上がることです。自分の持つている2%の力を信じ、そして助けてくれることを信じる。生きる希望を失わないことが、助かるか助からないかを分けるのだそうです。

この世もあの世も最終的には「他力」に頼るほかない我々、自分の力のなさ、至らなさを認め、おごらず、偉ぶらないことが、この世でもあの世でも必要なのうです。そして今一番試されているのが私たちの人権意識です。不安なときつい、ついでに我々は誰かをターゲットにし、差別の心が出てくるものです。感染した人、そして感染した人に関わった人、マスク

をしていない人、そしてただ単に中国の人、不安だからこそ出る差別ですが、人として許されるものではありません。我々一人一人の人権意識を今こそ高めてゆきましょう。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
藤谷勝正（目黒・祐天寺）
魚尾孝久（三島・願成寺）
大江田博導（仙台・西方寺）
加藤昌康（下北沢・森巖寺）
桑原恒久（川越・蓮馨寺）
桑原勇慈（甲府・瑞泉寺）
佐藤孝雄（鎌倉・高德院）
佐藤久雄（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光圓寺）
東海林良雲（塩釜・雲上寺）
河本悠大（函館・称名寺）
高口恭典（大阪・一心寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村康雅（清水・実相寺）
中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
成田昌憲（世田谷・大吉寺）
野上智徳（静岡・宝台院）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
堀田卓文（静岡・華陽院）
本多将敬（両国・回向院）
松溝泰彦（芝・寶松院）
水科善隆（長野・寛慶寺）

（敬称略・五十音順）

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十七巻 四月号頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 令和二年二月二十日
発行 令和二年四月一日

発行人 佐藤良純
編集人 加藤昌康
印刷所 株式会社 暁印刷

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階

発行所 法然上人讃仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七
FAX 〇三三・五七八・七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

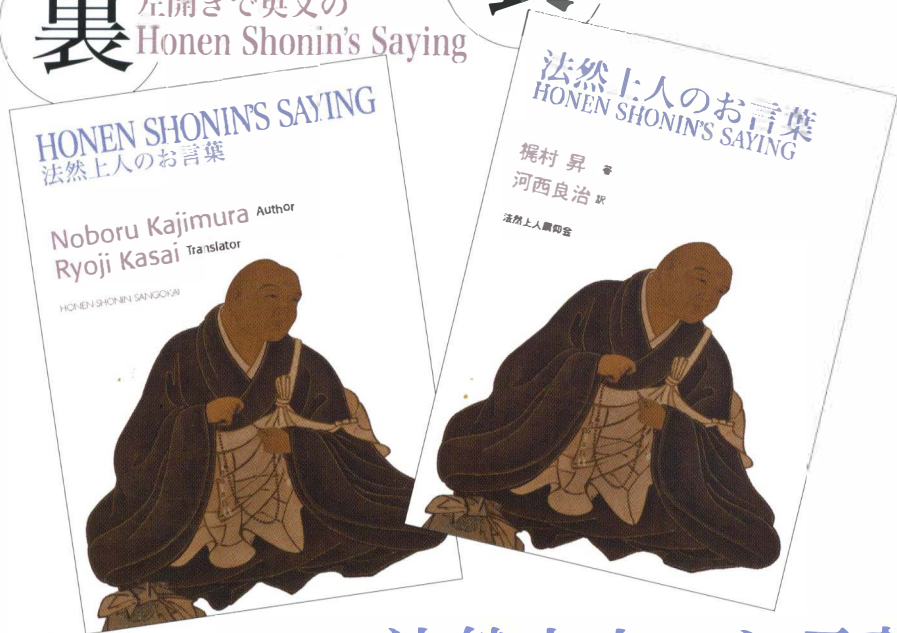
月刊浄土の連載が 単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表

右開きで和文の
ご法語



和英対応法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。